

スロヴェニア養蜂見聞記

塚本 夏実

スロヴェニアは、「中欧の貴石」とも呼ぶべき美しい小国だ。1999年に旧ユーゴスラヴィア連邦から独立したこの国の大きさは四国と同程度、人口はわずか二百万人だが、その自然風土は多様かつ雄大で、豊潤な歴史文化を誇る。国土の北辺はアルプス山系に抱かれ、南端はアドリア海を望む——朝方スキーを楽しんだら、お昼にはダイビングに興じることだってできるのだ。街を歩けばアール・ヌーヴォーのファサードに行き逢い、田舎を巡れば古代ローマの遺跡が迎えてくれる。「すべての丘に教会があり、教会がないならば城がある」と言われるほど多数残っている古い教会建築や城、マナーハウスも、あらゆる様式美で私たちを魅了する。

そしてなにより、スロヴェニアでは人々が実にいい顔をして生きている。動乱の歴史をくぐりぬけてきた国ではあるが、そこに荒廃の影は認められない。若者が携帯電話を片時も話さないのは本邦とも共通するところだが、今も昔も変わらない濃密で、けれども気安い人と人の絆

は、小国であるからこそ育まれたこの国の宝物なのだろう。日本ではいまだ身近な存在として認識されていないのが実にもったいない。物価は手頃で治安も良く、名産のワインは比類なく美味で、しかも多くの国民が英語をよく解す。観光の定番国として、もっともっと注目されてしかるべきだろう。

さて、私がかの国を訪れたのは1999年の盛夏のことだ。当時編集に従事していた『セブンシーズ』（株式会社アルク発行）という月刊総合誌で、スロヴェニアを大特集することになったのである。取材旅行は二週間にわたり、文字通り国中を縦横無尽に駆け回った。日本に在住しているスロヴェニア人写真家、ゴラズ・ヴィルハー氏に同行していただいたが、渡航前から話しに聞き、訪れるのを楽しみにしていた場所がある。そのひとつが首都リュブリャナの北西、ラドウリツァにある「養蜂博物館」だ。

スロヴェニアの養蜂文化は歴史も古く、独自の発展を遂げてきたという。ミツバチの固有種（カーニオラン）や、“伝説の養蜂家”（なんと魅惑的な！）、アントン・ヤンツァ氏などがよく知られているそうだが、私の心をもっともひきつけたのは、これもスロヴェニアに特異な「絵付け巣箱」（とでも称すればいいだろうか）の素朴な美しさだった。十八世紀半ばに現れたこの民間芸術では、その初期には巣箱の前面におもに宗教的なモチーフが描かれたという。以降しだいに世俗化し、民間伝承、当時の社会的背景



図1
(左) 養蜂博物館に収蔵された古い巣門飾り絵画。
(右) ハチミツから作られるリキュール、メディツァも販売されている。

などがテーマとなった。動物が狩人の骸を担ぐ「狩人の葬式」など、いささかブラックなテイストも好まれたようだ。風雨や日光に曝されて、失われてしまった戸板も多いそうだが、それでも同美術館にはたいへん貴重なコレクションが多数収められている。(図1) 外気にはめったなことで触れさせてはならないため一部を除いて非公開なのだが、ここでひきさがったなら私は単なる観光客になってしまう。渋る博物館員をなだめすかし、ミュージアムグッズを山と購入し、粘りに粘って重要文化財級の戸板を数点、特別に撮影させていただいた。色使いはあくまで優しく、あらわな木目の地模様がむしろ繊細な雰囲気をかもしだす。ミツバチと養蜂に対する人々の親愛の情が伝わってくるからなのだろう。眺めているだけでほっこりと心が温まってくるようだ。「そういえば」とヴィルハー氏が教えてくれた。スロヴェニアではミツバチが死ぬことを、通常は人間に対して使う「逝く」という意味の言葉で表現するのだという。なるほど、人と同等に扱われているというわけだ。

いまひとつ、正直に言うところにはちょっとり恐ろしくもあったのだけれど、めざすべき所があった。養蜂の国スロヴェニアへやってきて、本職に会わずに帰れるわけもない。私たちは山間部に、八十一歳になる養蜂家、ツィリル・ヤレン氏を訪ねたのである。

なんとしても私はミツバチ素人だ。門扉を叩く前から耳に届いてくる、ブンブンという羽音の重奏に緊張して、体が知らず知らず強ばってしまう。庭で巣箱をのぞきこんでいたヤレン

氏は、近づいていく私たちに気づくとおもむろに煙草をとりだし火をつけた。聞けばこの煙草、煙でミツバチを落ち着かせるためなのだという。それでも、工夫を重ねた手製巣箱の使い勝手の良さなどを熱心に語るヤレン氏の傍らで、ミツバチの動向が気が気でない私はひとり脂汗を浮かべていたのだった。(図2)

自宅から少し離れた小高い丘に停車させられているトラックは、まさに見物であった。(図3) 荷台には巣箱がぎっしりとすきまなく並べられており、さながら「ミツバチの移動マンション」といった風情。これらの箱にもにぎやかに絵が施されているのだが、驚いたことにミツバチは戸板の色と絵柄を覚えており、必ず自分の箱へ戻ってくるという。科学的根拠は私の預かり知らぬところだが、ミツバチたちが「あたしの箱はマリア様」、「あたしの家はケンカしてる人とトラ」なんて記憶しているのかもしれないと想像するのは、なんとも楽しかった。

スロヴェニアを後にして一年余が過ぎた。あいかかわらず毎日原稿と格闘しているが、そんなことに少し疲れると、私は養蜂博物館で求めたハニー・キャンドルのやわらかな香気を思い出す。おそろしく寒い日に飲み干したメディツァ(ハチミツのリキュール)のまるい味を思い出す。心がふわりと軽くなるのだが、そのあとすぐに、スロヴェニアの地を今度はいつ踏めるのだろうと、胸がちょっとりいたんでしまうのが疵なのだ。

(〒113-0033 東京都文京区本郷3-4-5

(株)IDG ジャパン、写真：ゴラズ・ヴィルハー)



図2 庭先の蜂小屋、巣門飾りは今も健在。



図3 蜂群移動用トラック。枠を使って巣箱を積み重ねる。